

日光の仮面Ⅳ ——東照宮の仮面——

北口 英雄

Nikko Masks IV —The Masks in the Toshogu—

Hideo KITAGUCHI

東照宮の鎮座

徳川家康は元和2年（1616）4月17日に駿河でなくなるが、その直前に本多正純、南光坊天海、金地院崇伝を枕元に招き、自分の死後「遺体を久能山に葬り、一周忌を過ぎなば小堂を日光山に建つべし、われは関八州の鎮護にならん」との遺言を伝えた。遺命を受けた二代将軍秀忠は元和2年10月に本多正純、藤堂高虎、天海を日光に使わし、敷地の決定後ただちに廟の造営を始め、翌年3月に建物が完成、家康の命日である4月17日に将軍秀忠を始め公武参列のもと正遷宮の儀式が行われた。ここに日光東照宮が鎮座したのである。朝廷からはすでに東照大権現の称号が授けられており、祭祀も天海僧正の指導のもとに山王一実神道に基づいて行われた。その時に建てられた東照社は、本社、拝殿、本地堂、廻廊、楼門、御供所、御厩、鳥居、御仮殿などである。残念ながら形式や規模、配置等について不明な点が多い。

三代将軍家光は、家康の二十一回忌の法要を機に寛永13年（1636）に社殿の全面的な大造替を行なった。これは日本古来の神社で行われていた式年造替の制度に従ったもので、元和3年の創建時の規模を一新するほどの大がかりなものだった。「日光東照宮造営帳」によると、工期は1年5ヵ月に及び、総工費は56万8000両、銀100貫目、米1000石、のべ454万人が工事に従事したと言われている。その後、奥社宝塔の造替や主要建造物の桧皮葺きから銅板瓦葺きへの葺き替えなど、部分的な改修を含めて江戸時代だけでも20数回に及ぶ造替、修理が行われた。今日の東照宮の規模は、ほぼ寛永13年の大造替の時に完成したと言われている。

神社名も正保2年（1645）に朝廷から宮号が宣下され、東照社から東照宮に改められた。

建築史上から言えば、寛永という時代は桃山以来の建築文化の発達が頂点に達した時期であり、当代を代表する一流の工匠たちが参加しての造作であった。建築の総指揮が幕府作事方の大棟梁甲良豊後守宗広であり、建築内外の彩色や障壁画は狩野探幽とその一門が行なった。本社宮殿の諸仏画、内々陣の彩色は絵所の木村了琢が描いた。そのほか鋳物師の椎名兵庫や鍛金工の長曾弥俊乗など、当時一流の美術工芸家達が参加しての造作である。まさに桃山時代の豪華華麗な建築様式に、江戸時代初期の善美を尽くした建築群である。

幕府は日光山の維持・管理のために、元和6年（1620）に東照社に5000石の社領を寄進、更

に明暦元年（1655）に4代將軍家綱が一万石に改め、新たに大猷院領として3600石余を加え都合1万3600石余が日光山領となった。同年に幕府は日光山の貫主に後水尾天皇の第三皇子守澄親王を輪王寺宮に迎え、御留守居以下別当、衆徒、社家、楽人、宮仕、神人、八乙女等を置いて法会や行事に奉仕させた。また元禄13年（1700）に幕府老中直属の日光奉行を新設、さらに防災のため八王子千人同心に火之番を命じ、治安の維持にあたらせるなど日光山の整備に努めた。

千人武者行列と東照宮の仮面

東照宮には舞楽面が31面、鼻高面が1面、掛面が50面、猿面が30面の計112面が伝存している。このうち鼻高面と猿面、掛面は春秋の祭礼である「千人武者行列」に今も使用されている。正式には「神興渡御祭」と呼ばれ、久能山で埋葬された徳川家康の神霊を翌年の元和3年4月17日に東照社に遷座したときの行列を再現したものであり、それに日光山古来からの儀式を加味して成立したものと言われている。規模や形式については、その後若干の変化はあるものの現在もほとんど同様に行なわれている。

現在の春季渡御祭は、戦後4月17・18日から5月17・18日に改められたが、初日の17日に神霊が三基の神輿に移され、二荒山神社に御渡し拝殿に一泊する。翌18日に神輿は神橋近くの御旅所に渡御するが、この時の行列が一般に「千人武者行列」と呼ばれており、供奉する人々は鉾持、獅子、田楽法師、八乙女、御神馬、鉄砲持、弓持、鎗持、鎧武者、兒子、掛面、子供猿面、猿牽、宮仕、神人、伶人、鷹匠、御幣、神輿、里山伏など総数約1000人である。持物や装束の変わった姿が多数あるので「百物揃千人行列」とも言われている。

以下、使用された仮面が渡御祭でどのように変わっていったかを「徳川実紀」や「晃山拾葉」所収の「日光山御神事記」、「日光山志」を参考に見ていくことにする。

鼻高面は元和三年の行列で二番目に登場「天狗面一人」とある。寛永13年の二十一回忌では「職事一人、高鼻之赤面」とあり、「日光山志」には「職士鉾持、神人一人、鳥兜、猿田彦命赤面」とある。当初から変わりがなく鼻高面は猿田彦面として使用されてきた。記紀神話の世界で瓊瓊杵尊が天界より降臨する際の先導をつとめた道案内人であり、祭礼などで邪鬼を払いながら先達する鼻高の天狗面である。

掛面は「日光山東照大権現御祭禮道具／面五拾貳函之内／寛永十三丙子四月十七日」と朱漆で書かれた箱に収められている。51面とあるのは鼻高面をふくめた数字である。元和3年に掛面の記載がなく、寛政13年の二十一回忌に初めて登場する。その時の様子が「祭礼行列次第」（日光山御神事記）に記載されている。要約すると懸面五捨人、種々の面をつけ、猩々皮の袖なし羽織に鳥文様の袷を着て、鱗模様のある袴をはき、金の左巻の棒を持つとある。「日光山志」にはより具体的に末社神、掛面五捨人、紺地に白く鱗形付たる袴をはき、種々異形なる面を被りとある。鱗文は能では鬼女の着付けや、荒神鬼畜を表わす役の装束文様に用いられる。変人を左巻と呼ぶこともある。「金ノ左巻の棒」という表現も尋常ではない。異形なる面とあるが、服装や持物も異形だったのである。

掛面には男面や女面、鬼神面、禽獣面がある。このうち女面は5面でお多福面を除く他の4面はすべて髪際に乱れ髪を描き、目尻の吊りあがった強い表情である。山内の二荒山神社には女面が6面あり、うち2面が目尻の吊りあがった仮面である。輪王寺には女面が18面あるが、すべて能面で言う中間表情のおだやかな女面である。「千人武者行列」に使用された掛面は、異様な雰囲気をもつ集団として演出されたのである。日光山には男体山を中心に古くから山岳信仰の霊場として、多くの人々に信仰されてきた。社や堂、村々の辻、境界、山の出入口や峰々の祠に神仏が祭られていた。民間信仰に根ざした妖怪神もいたであろう。それらの神仏が東照大権現の鎮座に供奉したのである。元和から寛永年間にかけて徳川幕府の諸機構も整い、国家統一の体制がほぼ完成した時期である。渡御祭に末社神を加えることにより、日光山における東照大権現の神威を示したのである。また御祭神を一層きわだたせるためにも、末社神の異形な姿を強調したものと思われる。

中世から近世初期にかけて、異形という言葉は守屋毅「中世芸能の幻像」や網野善彦「異形の王権」によると、中世の前期までは妖怪や鬼神を含む社会秩序の埒外で生きるかなり自由な風体の人々を指していたが、後期になるにつれて否定的、差別的用語として使用され、慶長9年(1604)の方広寺の祭礼に集まった被差別民の乞食や非人、穢多、皮剥、猿使の人々を「豊国大明神礼祭記」では「イルイ異形、有雑無雑」と呼び、この頃には差別語として定着していたと指摘された。天海を始めとする千人武者行列の演出者たちは、異形なる姿をした末社神をこのような目で見ていたのである。

掛面は毎年春秋の2回使用されてきたので欠損や割損があり、表面彩色は何度も塗りなおされてかなり印象を悪くしている。面裏も補修のため布貼りがされ、黒漆が厚く塗られて木地の見えないものもある。しかし手慣れた彫技や弾力性のある表情など、江戸初期の能面や狂言面と作風や技法が共通しており、当時の代表的な能面作家によって制作された仮面である。

猿面は元和3年の行列に、童子38人が猿面をつけて参加したとある。しかし寛永13年には30面と少なく、うち3面が白猿とある。現在も30面に変わりはないが、白猿面がなくすべて赤猿面である。白猿の出現は吉瑞の証とされ、柳田国男の「稗田阿禮」に、日向の新熊野三社権現の祭礼の日に、白猿が山から降りて来て神楽の節奏に従って舞踏をしたとの話しがある。猿は山王権現の神使であり、山王権現は天台宗の護法神である。

江戸時代の東照宮の主祭神は東照大権現であり、配祀神が山王権現と摩多羅神である。「千人武者行列」の三基の神輿と三匹の神馬は東照三所権現の乗物であり、三匹の白猿も同様に東照三所権現に対応する存在である。現在は猿面を腰の後に結び付けるが、寛永17年(1640)4月の家康二十五回忌に東照宮に奉納された狩野探幽筆「東照社縁起」(東照宮蔵)には、9匹の猿が描かれており、すべて着面した赤猿面である。また狩野常信(1636~1713)が靈臺院の命によって描いた「東照宮祭礼行列図」(東照宮蔵)に描かれた30匹の赤猿面も、手に持ったり頭の上につけた猿もいるが、大半は着面の赤猿面である。ところが元治元年(1864)に月亭の描いた「日光御宮祭礼原記」(栃木県立博物館蔵)では、着面の赤猿は2匹だけで、他は背

中に赤猿面をつけて賽銭を拾う姿で描かれている。

祭礼の様子について「徳川実紀」寛永13年4月17日の条に「辻々の警固には譜代大名人数を出す」とあり、「日光山御神事記」に「見物ノ貴賤ノ袖ヲツラネ平伏シテ拝シ奉リ尊敬セスト云事ナシ」とある。將軍家光を迎えての厳しい警護の中で、祭礼は粛々で行なわれていた。旗本の根岸鎮衛（1737～1815）が天明から文化年間にかけて人々から聞いた話を収録した「耳囊」に、「近郷・近村五里・十里の外より老若男女競ひ集りて、木の枝、柵の陰にまで群集して見物せること也。神興渡御の時は賽銭雨雪の降る如く、暫くが間は大地に色を変ずる程に銭を敷く事也」とある。この頃になると祭礼の様相もかなり変わってきたようで、多数の人々が見物に集まり、賽銭を投げ与えた。祭礼は本来厳肅なものだが、一般の人々が参加することによって娯楽化されていく。仮面に対する考えや、着面の仕方にも変化があった。寛永13年の二十一回忌に登場した白猿面が姿を消した背景に、幕府の祭礼に対する考えの変化があったものと思われる、かなり早い時期に姿を消したようである。現在猿面は衣裳類の入っていた長持に収納されており、制作年代は不明だが掛面と同じく寛永13年に新調されたものと思われる。

舞楽面は寛永13年銘のものが18面、大猶院（3代將軍家光）の七回忌に供えて明暦2年（1656）に制作されたものが13面残っている。特に散手面は春日大社（奈良市）の定慶作の散手面にそっくりであり、南都の舞楽面を参考に制作がおこなわれた。

「言緒卿記」の元和2年10月6日の条に、有職故実の家元である山科言緒は板倉伊賀守邸で翌年の4月17日に行われる東照社遷宮の際に使用する舞楽道具類の調達を命じられた。言緒は直ちにその月の24日に諸職人を呼びつけ、道具類の制作を命じた。この時に注文した舞楽面は、元和3年2月13日に京都楽所の一員である藺広遠と林広康の両名が山科言緒のもとに持参したとある。現在この舞楽面がどうなったかは不明だが、寛永13年4月の家康二十一回忌の大法会に際し、鼻高面や掛面と同じく舞楽面や菩薩面、舞楽装束類が新調された。現在輪王寺に「日光山／東照大権現社／舞楽装束□人前之内／寛永十三丙子年／四月吉日」の銘をもつ長持に舞楽装束が収められている。また重文に指定された輪王寺の舞楽面にも寛永13年銘があり、東照宮伝来の寛永13年銘の舞楽面とは本来一具であった。なお明暦2年銘の舞楽面は、寛永13年銘の舞楽面に比べて20年しかたっていないが、形式化の目立つ作柄である。

「晃山編年遺事」（晃山叢書一）の寛永13年3月の条に「惣御道具并舞楽道具、楽器、社家装束十二人前、京都ヨリ下ル也」とある。また明暦元年（1655）9月の「日光山下知条々」に、御祭礼御法事の御道具類は御蔵に納め毎年6月の土用中に虫干を行うようにとの通達が幕府より出された。社殿の大造替に伴って道具類も一新されたのである。

【舞楽面】

1 陵王 一面 木造漆箔彩色／縦37.7 幅27.4 奥18.7／明暦二年（1656）

面裏朱漆銘「日光山／陵王面／明暦二丙申季／十一月日」

怪貌、頭上に四肢のある龍を頂く。両耳後方に雲形を表す。頭髮は毛筋彫り、動眼、吊頸、上歯4本を表し、眉毛、口髭、顎鬚、頬髯を植毛する。

面部一材、龍の顎と首に矧ぎ目あり、顎は上下二材、舌、前後両足、雲形は各別材である。薄肉彫。龍は玉眼嵌入、面部の動眼と上歯4本は銅板製鍍金である。面部の眼窩と鼻孔を削りぬく。紐孔は左右の縁に各一をうがつ。動眼は一材、左右の縁と面部に小孔をうがち紐で結ぶ。吊顎は動眼の下方内側と吊顎の左右に小孔をうがち細紐で吊る。口髭は木地に小孔をうがち植毛をする。表面は平滑に浚い、錆下地に漆箔を施す。頭髮は群青彩、毛筋に切金、唇と鼻孔は朱彩である。裏面も平滑に浚い、黒漆塗とする。頭上の龍の頭髮表面は朱彩に金泥塗、裏面は朱彩に金泥で毛筋を描く。舌と口腔は朱彩、鱗と翼は金泥塗の上に輪郭を朱描、内側に朱や群青彩、緑青彩を施す。雲形は錆下地に金泥塗、輪郭は朱描、内側に緑青を施す。裏面は四種類からなり、全面胡粉地に赤に橙色と白、群青に水色と白、緑青に白緑色と白、褐色に白が縹緗彩色風に賦彩されている。雲形もほぼ同様である。

保存状態は龍の羽根が前後二材だが、当初は一材だったと思われる。他は良好である。

2 ニノ舞(咲形) 一面 木造彩色／縦28.3 幅20.4 奥13.0／寛永13年(1636)

裏面朱漆銘「日光山／東照大権現社／二舞／寛永十三丙子／四月吉日」、貼紙墨書銘「二ノ舞面貳之内」

面奥の深い仮面、全面に皺を刻み、眼を細め透歯を見せて笑う老貌相である。

縦一材製、厚肉彫。眼孔(半円形)と鼻孔、口孔(上下歯の間)を削りぬく。紐孔は両耳の後縁面から面裏に各一をうがつ。表面は平滑に浚い、錆下地に胡粉下地彩色(後縁面にまわる)を施す。面部は黒褐色彩、唇は朱彩、上下歯は白彩である。面裏は黒漆塗。後縁面を平に彫り残して平滑に削りあげる。保存状態は良好、貼紙は後補である。

3 ニノ舞(腫面) 一面 木造朱漆塗彩色／縦24.7 幅18.2 奥13.7／寛永13年(1636)

面裏朱漆銘「日光山／東照大権現社／二舞／寛永十三丙子四月吉日」、貼紙墨書銘「二ノ舞面貳之内」

面奥の深い仮面である。額や両目、鼻のまわりが腫れ、口を開いて舌を出す不整形な老婆。両耳を表す。

縦一材製、厚肉彫。眼孔(半月形)と鼻孔、口孔の一部を削りぬく。紐孔は両耳の上部に各一をうがつ。表面は平滑に浚い、錆下地に胡粉下地彩色を施す。面部は茶褐色彩(後縁面にまわる)を施す。唇と舌は朱漆塗である。面裏は黒漆塗。後縁面を平に彫り残して平滑に削りあげる。眼孔のまわりは漆箔である。保存状態は良好。貼紙は後補である。

4 採桑老 一面 木造彩色／縦20.9 幅16.0 奥9.4／明暦2年(1656)

面裏朱漆銘「採桑老／明暦二丙申年／十一月日」

額や頬に皺を刻む老貌相、動眼、切顎。口を開いて上下の透歯を見せ眉毛、口髭、顎鬚を植毛する。

桧縦一材製、薄肉彫。動眼と顎は別材、動眼は左右の縁と面部に小孔をうがち紐で結ぶ。切顎も面部に紐で結ぶ。動眼と瞳孔、鼻孔を削りぬく。紐孔は左右の縁に各一をうがつ。眉毛と口髭、顎鬚は小穴に麻紐を植毛する。髪際に段差をつける。表面は平滑に浚い、錆下地に胡粉

下地彩色を施す。面部と上下脣、上下歯は白彩、頭髮は黒漆塗、眼窩の輪郭は墨描、眼球と目頭、目尻は薄墨描、唇は朱彩である。面裏は黒漆塗。後縁面を薄く平に彫り残して平滑に削りあげる。保存状態は良好である。

5 散手 一面 木造赤漆塗／縦27.2 幅20.7 奥13.2／明暦2年（1656）

面裏朱漆銘「散手／明暦二丙申季／十一月日／日光山」、貼紙墨書銘「散手面壹個」

面長。額広く眉間に窘縮を表す。眉毛と横鬚を逆立て、目線を下方に向けて鼻孔を広げる忿怒相。耳の全形をあらわす。

縦一材製、厚肉彫。瞳孔（円形）と鼻孔、口孔（上下歯の間）を削りぬく。紐孔は両耳の縁に各二をうがつ。眉毛と口髭は毛皮を貼って植毛をする。横鬚と顎鬚は木地に小孔をうがち竹釘で留める。表面は平滑に仕上げ錆下地に朱漆塗（後縁面にまわる）である。眼球と上下歯は漆箔。面裏は黒漆塗、後縁面を厚く平に彫り残して平滑に削りあげる。目の部分は円形、鼻の部分は洋梨形に彫りくぼめる。面頂中央に穴があり、紐（龍の胃を取りつける）を結ぶ。

保存状態は眉毛の獣毛が一部欠失する。貼紙は後補である。

6 抜頭 一面 木造赤漆塗／縦30.0 幅21.9 奥15.4／明暦2年（1656）

面裏朱漆銘「抜頭／明暦二丙申季／十一月日／日光山」

面長、面奥の深い仮面である。額広く眉を吊りあげ太い驚鼻に鼻孔を広げ、頭髮を左右に垂らして目を怒らせる忿怒相である。

縦一材製、厚肉彫。瞳孔（楕円形）と鼻孔、口孔（上下歯の間）を削りぬく。紐孔は両耳の後縁面から面裏に各一をうがつ。頭髮の黒紐は面頂に小孔をうがち、2穴一組で紐を結んで垂らす。表面は平滑に仕上げ、黒漆地に朱漆を塗る。眉と上下歯は黒漆塗、眼球は漆箔である。

保存状態は頭髮の黒紐は後補である。

7 退宿徳 六面 木造彩色／縦20.8 幅15.5 奥9.01／明暦2年（1656）

面裏朱漆銘「退走禿／明暦二／日光山／六面之内」、貼紙墨書銘「退宿徳 面六個之内」

顔の中央に三角形の大きな鼻を表す。頭部に二段の段差をつけ、眉間に花卉状の4筋の窘縮を表し、両目を一杯に開き、閉口して上下歯を見せる壮年の男面である。

縦一材製、薄肉彫。瞳孔（円形）と鼻孔、口孔（上下歯の間）を削りぬく。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色を施す。面部は肉色彩、頭髮と上下歯は墨彩、眉毛と口髭、顎鬚は墨描と白描、眼球と瞳孔の輪郭は墨描、そのまわりを薄く朱描、鼻孔の内側と唇、舌は朱彩である。面裏は黒漆塗、後縁面を薄く平に彫り残して平滑に削りあげる。

保存状態は表面彩色と紐、貼紙は後補である。

8 胡徳楽 六面 木造赤漆塗／縦24.6 幅18.4 奥16.9／寛永13年（1636）

面裏朱漆銘「日光山／東照大権現社／胡徳楽六之内／寛永十三丙子四月吉日」、貼紙墨書銘「胡徳楽面六之内」

円頂、髪際に段差をつける。太く長い鼻柱に鼻翼ふくらみ、口を三日月状に開いて笑う壮年の男、口髭と顎鬚を表す。

面部一材、鼻は別材、薄肉彫。眼窩（杏仁形）と鼻孔、口孔（上下歯の間）を割りぬく。紐孔は左右の縁に各一をうがつ。表面は平滑に浚い、面部は赤漆塗、頭髮と鼻孔は黒漆塗、眉毛と口髭、顎鬚は黒漆描。面裏は黒漆塗、後縁面を薄く彫り残して平滑に割りあげる。

保存状態は紐と貼紙は後補である。

六面のうち五面は鼻梁上部に小孔をうがち、別材の鼻柱を紐で結び付け、鼻が左右にゆれる造作である。残る一面は鼻が固定されている。

9 地久 六面 木造赤漆塗／縦20.6 幅15.0 奥10.5／寛永13年（1636）

面裏朱漆銘「日光山／東照大権現社／地久六之内／寛永十三丙子卯月吉日」

面頂、髪際に段差をつける。太い鼻柱に小鼻ふくらみ、二重瞼の目尻を下げ、口を三日月状に開いてほほえむ壮年の男。口髭と顎鬚を表す。

縦一材製、薄肉彫。眼孔（三日月形）と鼻孔、口孔（上下唇の間）を割りぬく。紐孔は左右の縁に各一をうがつ。表面は平滑に仕上げ、面部は赤漆塗、頭髮と上瞼、眉毛、口髭、顎鬚を黒漆で描く。面裏は黒漆塗、後縁面を薄く彫り残して平滑に割りあげ、眼の部分は三日月形、鼻の部分は三角形に彫りくぼめる。保存状態は紐が後補である。

10 貴徳 一面 木造彩色／縦20.9 幅15.5 奥10.5／明暦2年（1656）

面裏朱漆銘「貴徳／明暦二丙申季／十一月日／日光山」

大きな鼻、眉毛逆立ち、両眼を開いて口をへしめる瞋怒相である。

縦一材製、面頂は水平、薄肉彫。瞳孔（円形）と鼻孔を割りぬく。紐孔は左右の縁に各一をうがつ。眉毛と口髭、顎鬚は毛皮を貼って植毛をする。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色を施す。面部は白彩、眼球の輪郭は赤描、上下唇は赤彩である。面裏は黒漆塗、後縁面を薄く彫り残して平滑に割りあげる。保存状態は表面彩色と紐は後補である。

11 崑崙八仙 四面 木造彩色／縦20.2 幅16.8 奥11.7／寛永13年（1636）

面裏朱漆銘「日光山／東照大権現社／八仙四之内／寛永十三丙子卯月吉日」、貼紙墨書銘「八仙面四個之内」

額や眉間、目のまわり、頬に様式化された皺を刻み、嘴に金属製の鈴をぶら下げる。

縦一材製、薄肉彫。瞳孔（円形）と鼻孔、左右の口孔を割りぬく。紐孔は左右の縁に各一をうがつ。眉毛は木地に小孔をうがち木釘で留める。表面は平滑に浚い、錆下地に胡粉下地彩色を施す。面部は緑彩（後縁面にまわる）、眼孔のまわりは漆箔、唇から顎にかけて朱描で鬚を描く。面裏は黒漆塗、後縁面を薄く彫り残して割りあげる。保存状態は紐と貼紙は後補である。

12 納曾利 二面 木造彩色／縦24.6 幅17.2 奥14.2／明暦2年（1656）

面裏朱漆銘「納曾利／明暦二丙申季／十一月日／日光山」、貼紙墨書銘「納曾利面・貳個之内」

怪貌、動眼、吊顎。頭髮と眉毛、顎鬚を植毛する。眉間に窘縮を表し、目を一杯に見開き、上下に牙を出し耳を表す。

桧縦一材製、薄肉彫。動眼と顎は別材。動眼と上下の歯と牙は銅板製鍍金。眼窩と瞳孔、鼻孔を割りぬく。紐孔は左右の耳に各一をうがつ。動眼は一材、その上に銅板を当て左右の縁と

面部に小孔をうがち紐で結ぶ。吊顎は動眼の下方に小孔をうがち紐で吊す。眉毛は木地に小孔をうがち竹釘で留める。表面は平滑に仕上げ、面部は錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は群青彩、動眼のまわりは朱描、鼻孔の内側と唇、舌は朱彩である。面裏は黒漆塗、後縁面を薄く平に彫り残して平滑に割りあげる。

保存状態は紐と貼紙は後補、彩色の一部に剥落がある。

【鼻高面】

1 鼻高（猿田彦命）一面 木造彩色／縦32.8 幅17.8 奥28.5／寛永13年（1636）

顔の中央に隆起した太くたくましい鼻、太い眉に飛びでた眼球、へしめた口など異相である。

縦一材製、鼻は別材、厚肉彫、眼球は銅板製鍍金。瞳孔（円形）と鼻孔を割りぬく。紐孔は左右の縁に各一をうがつ。表面は平滑に仕上げ、錆下地に赤漆（後縁面にまわる）を塗る。面部は赤漆塗、眉と顎鬚、頬髯は墨描である。面裏は拭漆、後縁面を厚く平に彫り残して割りあげる。ノミ跡が全面にあり、目の周辺から面頂中央に向けて斜に、それ以外はほぼ横並びにある。目の部分は円形、鼻の部分は洋梨形に彫りくぼめる。保存状態は紐が後補である。

【掛面】

1 男 一面 木造彩色／縦20.4 幅13.8 奥7.5／寛永13年（1636）

面長、色白で太いヒゲを生やし、開口して上下歯を表す壮年の男面である。

桧縦一材製、薄肉彫。瞳孔（円形）と鼻孔、口孔（上下歯の間）を割りぬく。紐孔は左右の縁に各一をうがつ。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は肌色彩、頭髮は墨彩、眉毛と口髭は墨描、眼球と上下の歯は白彩、眼球の輪郭は墨描である。面裏は拭漆、後縁面を薄く平に彫り残し両側面と上部に浅くノミ跡を残して割りあげる。瞳孔の内側は白彩である。

保存状態は表面彩色と紐は後補、面頂から顎に割損がある。

2 男 一面 木造彩色／縦20.0 幅15.2 奥8.3／寛永13年（1636）

面裏陰刻銘「十五」、面裏墨書銘「十五」

顔と左右の目が不整形。頬骨突き出て眼窩がくぼみ、鼻孔をひろげ口をすぼめて舌先を出す瘦せた男面である。

縦一材製、薄肉彫。瞳孔（円形）と鼻孔を割りぬく。紐孔は左右の縁に各一をうがつ。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は茶彩、頭髮と眉毛、上脣は墨描、眼球と舌は白彩、上唇は赤描である。面裏は拭漆、後縁面を薄く彫り残して割りあげる。ノミ跡はほぼ全面にあり、目の部分は円形、鼻の部分は洋梨形に彫りくぼめる。

保存状態は表面彩色と紐は後補、割損が面裏の両側面にあり布貼りをする。

3 男（老年）一面 木造彩色／縦18.7 幅14.7 奥9.0／寛永13年（1636）

面裏陰刻銘「十四」

左右の不整形な顔である。頬に皺を刻み、への字形の目に透歯を見せる老貌相である。

縦一材製、厚肉彫。眼球（への字形）と鼻孔、口孔（上の透歯と下唇の間）を割りぬく。紐

孔は左右の縁に各一をうがつ。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は青磁色彩、唇は赤彩、透歯は白彩である。面裏は黒漆塗、後縁面を厚く平に彫り残して削りあげる。ノミ跡はほぼ全面に縦に細く浅くあり、目の部分は楕円形、鼻の部分は洋梨形に彫りくぼめる。

保存状態は表面彩色と紐、面裏の黒漆塗は後補である。補修のための布貼りが面裏の額側面二ヶ所と左瞳孔から口元、顎にある。

4 男（老年）一面 木造彩色／縦19.9 幅13.9 奥8.0／寛永13年（1636）

面裏陰刻銘「二六」、面裏墨書銘「二六」

への字形の目に低平な鼻、額から目尻、頬、顎にかけて浅い皺を刻む好々爺の風貌である。

桐縦一材製、面頂はほぼ一直線に切る。眼孔（への字形）と鼻孔、口孔（上の透歯と下唇の間）を削りぬく。紐孔は左右の縁に各一をうがつ。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は肌色彩、眉毛と口髭、顎鬚は黒描、唇は赤彩、透歯は黒彩である。面裏は拭漆、後縁面を薄く彫り残して平滑に削りあげる。

保存状態は表面彩色と紐は後補、面裏の下顎に補修のための布貼りがある。

5 男 一面 木造彩色／縦22.6 幅16.6 奥11.8／寛永13年（1636）

眉間に太い窘縮を表し、小鼻をふくらませ顔一面に皺を刻み、大笑する壮年の男面である。

縦一材製、厚肉彫。眼球（半月形）と鼻孔、口孔（上透歯と下唇の間）を削りぬく。紐孔は左右の縁に各一をうがつ。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色を施す。面部は肌色彩、眉毛と口髭、顎鬚は墨描、上下唇は朱彩、上透歯は白彩である。面裏は黒漆塗、後縁面を厚く平に彫り残して削りあげる。ノミ跡はほぼ全面に横並びにある。

保存状態は表面彩色と紐、面裏の黒漆塗は後補である。

6 男 一面 木造彩色／縦20.6 幅15.3 奥10.0／寛永13年（1636）

頬骨こけて眼窩くぼみ、眉毛と口髭に白髪之交じる老貌相である。

縦一材製、薄肉彫。瞳孔（円形）と鼻孔、口孔（上歯と下唇の間）を削りぬく。紐孔は左右の縁に各一をうがつ。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は茶彩、眼球と上歯は白彩、上脰は黒描、眉毛と口髭は白描と墨描、唇は赤彩である。面裏は拭漆、後縁面を平に彫り残して削りあげる。ノミ跡は上部と下部は横に、左右側面は内側に向けて斜にある。目の部分は円形、鼻の部分は洋梨形に彫りくぼめる。

保存状態は表面彩色と紐は後補、上端から右側面にかけて欠損がある。

7 男（老年）一面 木造彩色／縦20.4 幅14.7 奥10.0／寛永13年（1636）

面裏陰刻銘「十」

額広く、眼窩が窪み、頬骨突き出て上歯を表す老貌相。耳を表す。

桐縦一材製、薄肉彫。瞳孔（円形）と鼻孔、口孔（上歯と下唇の間）を削りぬく。紐孔は両耳に各一をうがつ。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は肌色彩、眉毛は墨描、目頭と目尻は墨描、上歯は黒彩、唇は赤彩である。面裏は拭漆、

後縁面を薄く平に彫り残して割りあげる。ノミ跡は額と顎は縦にあり、目の部分は円形、鼻の部分は洋梨形に彫りくぼめる。

保存状態は表面彩色と紐は後補、補修のための布貼りが面裏の左右側面にある。

8 男 一面 木造彩色／縦20.5 幅15.9 奥8.4／寛永13年（1636）

面裏墨書銘「十七」

壮年の男、太い眉に鼻柱太く、目尻の吊りあがった異形相である。

桧縦一材製、薄肉彫。面頂はほぼ一直線に切る。瞳孔（円形）と鼻孔、口孔（上歯と下唇の間）を割りぬく。紐孔は左右の縁に各一をうがつ。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は肌色彩、眉毛と上瞼は墨描、眼球は肌色彩、唇は赤彩、上歯は白彩である。面裏は拭漆、後縁面を厚く彫り残して割りあげる。全面に縦に細いノミ目を残し、目の部分は円形、鼻の部分は洋梨形に彫りくぼめる。

保存状態は面頂から左右の瞳孔、顎にかけて割損がある。補修のための布貼りが面裏の面頂左右側面と顎にある。

9 男 一面 木造彩色／縦21.8 幅15.7 奥8.7／寛永13年（1636）

目尻を吊りあげ、鼻翼をふくらませ、顎にくくりを入れる下膨れのした壮年の男面である。

縦一材製、厚肉彫。瞳孔（円形）と鼻孔、口孔（上歯と下唇の間）を割りぬく。紐孔は左右の縁に各一をうがつ。口の両端に割り込みを入れる。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色を施す。面部は肌色彩、眉毛と口髭は墨描、眼球と上歯は白彩、唇は赤彩である。面裏は拭漆、後縁面を平に彫り残して割りあげる。ノミ跡を全面に残し、目の部分は円形、鼻から上唇の部分は洋梨形に彫りくぼめる。

保存状態は表面彩色と紐は後補である。面裏に補修のための布貼りが面頂から左瞳孔、右側面と顎にある。

10 男 一面 木造彩色／縦20.8 幅14.1 奥7.0／寛永13年（1636）

面裏陰刻銘「卅」、面裏墨書銘「三十」

面長、卵形。眉根を寄せ、口を開いて上歯を見せ、さびしげに笑う若い男面である。

桧縦一材製、薄肉彫。瞳孔（円形）と鼻孔、口孔（上歯と下唇の間）を割りぬく。紐孔は左右の縁に各一をうがつ。唇の左右に割り込みを入れる。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部と眼球は肌色彩、眉毛と上瞼は墨描、上下唇は朱彩である。面裏は拭漆、後縁面を薄く彫り残して割りあげる。ノミ跡を全面に残し、目の部分は円形、鼻の部分は三角状に彫りくぼめる。

保存状態は表面彩色と紐は後補、面裏に補修の跡がある。

11 女 一面 木造彩色／縦21.0 幅13.6 奥7.8／寛永13年（1636）

面裏陰刻銘「七」、面裏墨書銘「七」

細い乱れ髪が頭頂から両耳脇にある。小さい鼻に目尻を少し吊りあげ、開口して上歯と舌を見せ、下唇を突き出す細面の若い女面である。

桧縦一材製、薄肉彫。瞳孔（円形）と鼻孔、口孔（上歯と下唇の間）を割りぬく。紐孔は左右の縁に各一をうがつ。口の両端に割り込みを入れる。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は肌色彩、頭髮は黒彩と黒描、上瞼は墨描、眼球は白彩、唇は赤彩、上歯は黒彩である。面裏は拭漆、後縁面を薄く彫り残して割りあげる。浅いノミ跡がほぼ全面にあり、目の部分は瞳孔より少し大きい程度の円形、鼻の部分は三角形に彫りくぼめる。

保存状態は表面彩色と紐が後補、補修のための布貼りが面裏の面頂にあり、割損が顎にある。

12 女 一面 木造彩色／縦21.5 幅14.5 奥8.0／寛永13年（1636）

頭髮を左右に振り分け、乱れた添毛が両側面に垂れる。鼻筋通った小さな鼻に目尻を吊りあげ、開口して上歯を表す若い女面である。

桧縦一材製、薄肉彫。瞳孔（楕円形）と鼻孔、口孔（上歯と下唇の間）を割りぬく。紐孔は左右の縁に各一をうがつ。口の両端に割り込みを入れる。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は肌色彩、頭髮は黒彩と黒描、眼球は肌色彩、目頭と目尻、上下瞼は墨描、唇は赤彩、上歯は黒彩である。面裏は黒漆塗、後縁面を薄く彫り残して割りあげ、ノミ跡を両側面に少し残す。目の部分は円形、鼻の部分は洋梨形に彫りくぼめる。瞳孔と鼻孔の内側は白彩、口腔の内側は赤彩である。

保存状態は表面彩色と紐、面裏の黒漆塗は後補である。補修のための布貼りが面裏の額に二ヵ所、左側面と顎にある。

13 女 一面 木造彩色／縦20.8 幅24.2 奥18.1／寛永13年（1636）

面裏白書銘「六」

面長、卵形。広い額に二筋の添毛が頭頂から両側面に垂れる。鼻筋通った大きな鼻に目を吊りあげ、大きく開口して上下の歯を見せる若い女面である。

縦一材製、薄肉彫。瞳孔（円形）と鼻孔、口孔（上下歯の間）を割りぬく。紐孔は左右の縁に各一をうがつ。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部と眼球は肌色彩、唇は赤彩、上下歯と瞳孔の内側は黒彩である。面裏は拭漆、後縁面を薄く彫り残して平滑に割りあげる。目の部分は円形、鼻の部分は洋梨形に彫りくぼめる。

保存状態は表面彩色と紐は後補、面裏の中央二ヵ所と左右両側に補修のための布貼りがある。白書銘も後筆である。

14 女 一面 木造彩色／縦20.6 幅14.0 奥7.1／寛永13年（1636）

ふっくらとした頬に太い鼻梁、添毛二筋が頭頂から両耳脇に垂れる。開口して上歯を見せる唇の薄い女面である。

縦一材製、薄肉彫。瞳孔（円形）と鼻孔、口孔（上歯と下唇の間）を割りぬく。紐孔は左右の縁に各一をうがつ。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は肌色彩、眼球は白彩、上瞼は黒描、唇は赤彩、上歯は黒彩である。面裏は拭漆、後縁面を平に彫り残して割りあげる。全面に横にノミ跡を残し、目の部分は円形、鼻の部分は洋梨形

に彫りくぼめる。

保存状態は表面彩色と紐は後補、面裏に補修のための布貼りが三ヶ所にある。両側面にも補修のあとがある。

15 女（乙）一面 木造彩色／縦19.0 幅17.8 奥8.5／寛永13年（1636）

面裏墨書銘「一」

顔の中心に目鼻口を寄せ、頬にエクボを表すお多福面である。

桐縦一材製、薄肉彫。眼球と鼻孔、口孔（上歯と下唇の間）を削りぬく。紐孔は左右の縁に各一をうがつ。表面は平滑に仕上げ、黒漆地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は肌色彩、頭髮は黒描と黒彩、眉毛は黒描、上下唇と舌は赤彩、上歯は黒彩である。面裏は拭漆、後縁面を平に彫り残して削りあげる。ノミ跡は下方に少し残すが他はほぼ平滑である。

保存状態は表面彩色と紐は後補、その彩色も一部に剥落がある。右側面に欠損があり、補修のための布貼りが面裏の左面頂から顎にある。

16 鬼神 一面 木造彩色／縦20.5 幅19.4 奥11.5／寛永13年（1636）

鼻翼をひろげ、眉と頬の肉が隆起して眼窩がくぼみ、裂けた口元から金色の歯と牙を表し、顎を突き出す。耳の全形を表す。

桐縦一材製、厚肉彫。瞳孔（楕円形）と鼻孔、口孔（上歯と下唇の間）を削りぬく。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は赤彩、眼球と上下歯、牙は弁柄漆に箔下漆を塗って箔を貼る。面裏は拭漆、後縁面を厚く平に彫り残して平滑に削りあげる。目の部分は円形、鼻の部分は洋梨形に彫りくぼめる。

保存状態は表面彩色と箔押し、紐は後補である。割損が右下歯の牙から顎にある。面裏の全面に布貼りによる補修のあとがある。

17 鬼神（阿形）一面 木造彩色／縦19.8 幅16.4 奥9.7／寛永13年（1636）

面裏墨書銘「四二」

耳の位置が高く、目尻の吊りあがった金色の目や、鼻孔をひろげた驚鼻、口元裂けて金色の歯列と牙を見せる忿怒相である。

桐縦一材製、薄肉彫。瞳孔（円形）と鼻孔を削りぬく。紐孔は両耳に各一をうがつ。口孔は窪めるが面裏には貫通しない。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は鉄色彩、眼球と上下歯と牙は弁柄漆に箔下漆を塗って箔を貼る。歯茎と舌は赤彩である。面裏は拭漆、後縁面は厚く平に彫り残して削りあげる。ノミ跡はほぼ全面にあり、両側面は左上から斜右下方にある。目の部分は円形、鼻の部分は洋梨形に彫りくぼめる。

保存状態は表面彩色と箔押し、紐は後補、その彩色も一部に剥落がある。割損が左側面の面頂から顎にあり、面裏の両側面にも補修のための布貼りがある。

18 鬼神（阿形）一面 木造彩色／縦21.0 幅16.2 奥9.7／寛永13年（1636）

面裏陰刻銘「十九」

額にV字形の皺と眉間に窘縮を表す。眉は逆立って隆起し、金色の目と金歯を表す激しい怒

りの相である。

縦一材製、薄肉彫。瞳孔（楕円形）と鼻孔、口孔（上下歯の間）を削りぬく。紐孔は両耳の上縁に各一をうがつ。表面は錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は赤彩、眼球と上下歯列、牙は弁柄漆に箔下漆を塗って箔を貼る。面裏は拭漆、後縁面を平に彫り残して削りあげる。ノミ跡はほぼ全面に横並びにあり、目の部分は円形、鼻の部分は洋梨形に彫りくぼめる。

保存状態は表面彩色と紐は後補、その彩色も一部に剥落がある。補修のための布貼りが面裏の全面にある。

19 鬼神（阿形）一面 木造彩色／縦20.3 幅16.2 奥11.8／寛永13年（1636）

面裏陰刻銘「廿四」

面長、額に深い皺を刻む。眉と頬の筋肉が隆起し、口元裂けて怒りを全身で表す。耳の全形を表す。

桐縦一材製、厚肉彫。瞳孔（円形）と鼻孔、口孔（上下歯の間）を削りぬく。紐孔は両耳の上縁に各一をうがつ。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は苦色彩、眉毛と口髭、顎鬚は黒描、額の皺と眉間から上脛にかけて、鼻翼の周囲、顎の窪み、上下唇は各赤描である。眼球と上下歯、牙は弁柄漆に箔下漆を塗って箔を貼る。面裏は拭漆、後縁面を厚く平に彫り残して削りあげる。ノミ跡は全面に横並びにある。

保存状態は表面彩色と箔押し、紐は後補、割損が右面頂から右耳下にある。補修のための布貼りが面裏の右側面と顎にあり、木屑漆による修理が顎にある。

20 鬼神（飛出）一面 木造彩色／縦22.0 幅16.6 奥10.7／寛永13年（1636）

金色の両目を見開き、鼻孔をひろげ、大きな口から真赤な舌と金色の歯を表す忿怒相。耳の全形を表す。

桐縦一材製、薄肉彫。瞳孔（円形）と鼻孔、口孔（上下歯の間）を削りぬく。紐孔は両耳の上縁に各一をうがつ。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は肌色彩、眼球と上下歯列は弁柄漆に箔下漆を塗って箔を貼る。上下唇と舌は赤彩である。面裏は拭漆、後縁面を薄く彫り残して削りあげる。ノミ跡は上部に横並びの浅いノミ目を残す以外は、ほぼ平滑である。目の部分は円形、鼻の部分は洋梨形に彫りくぼめる。

保存状態は表面彩色と箔押し、紐は後補、その彩色も一部に剥落がある。面裏の下唇に欠損があり、補修のための布貼りが左右の側面にある。左顙顚とその下方にも補修の跡がある。

21 鬼神（阿形）一面 木造彩色／縦21.2 幅16.1 奥11.1／寛永13年（1636）

面裏墨書銘「十」

鼻柱太く、眼球と上歯に金色を表す。眉と目を八の字に寄せ、額から目尻、頬に皺を刻む老貌相である。

縦一材製、厚肉彫。瞳孔（円形）と鼻孔、口孔（上歯と下唇の間）を削りぬく。紐孔は左右の縁に各一をうがつ。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。

面部は肌色彩、眉毛は黒描、眼球と上歯は弁柄漆に箔下漆を塗って箔を貼る。上下唇と舌は赤彩である。面裏は拭漆、後縁面を厚く平に彫り残して割りあげる。ノミ跡は全面に横並びにあり、目の部分は円形、鼻の部分は洋梨形に彫りくぼめる。

保存状態は表面彩色と箔押し、紐は後補、割損が面頂から顎にかけて左側面にある。

22 鬼神（阿形）一面 木造彩色／縦21.4 幅17.2 奥10.8／寛永13年（1636）

額が瘤状に盛り上がり、眉間に窘縮を表す。眉と目を逆立て、太い鼻柱に金色の目と歯を見せ、そのまわりに赤を添えて怒りの相を表す。

縦一材製、厚肉彫。瞳孔（円形）と鼻孔、口孔（上下歯の間）を割りぬく。紐孔は左右の縁に各一をうがつ。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は肌色彩、眉毛は黒彩、眼球と上下歯は弁柄漆に箔下漆を塗って箔を貼る。その周辺と上下唇は赤描である。面裏は黒漆塗、後縁面を平に厚く彫り残して割りあげる。ノミ跡はほぼ全面に横並びにあり、目の部分は円形、鼻の部分は洋梨形に彫りくぼめる。

保存状態は表面彩色と箔押し、紐、面裏の黒漆塗は後補である。割損が面頂から顎下にある、補修のための布貼りが面裏の左側面と顎にある。木屑漆による補修が右面頂から顎にある。

23 鬼神（阿形）一面 木造彩色／縦20.5 幅15.2 奥10.5／寛永13年（1636）

面裏墨書銘「四四」

目尻を吊りあげ、鼻柱太く口元裂けて無気味に笑う怪貌相である。

縦一材製、厚肉彫。瞳孔（円形）と鼻孔を割りぬく。紐孔は左右の縁に各一をうがつ。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は葡萄茶彩、上瞼は黒描、眼球と上下歯は白彩、上下唇は橙色彩である。面裏は拭漆、後縁面を薄く平に彫り残して割りあげる。ノミ跡は全面にあり、目の部分は円形、鼻の部分は洋梨形に彫りくぼめる。

保存状態は表面彩色と紐は後補、その彩色も一部に剥落がある。割損が両側面にある、補修のための布貼りが面裏の右側面と顎にある。

24 鬼神（阿形）一面 木造彩色／縦20.3 幅15.5 奥9.0／寛永13年（1636）

面裏墨書銘「五十」

眉と目を逆立て、驚鼻に頬の筋肉を吊りあげ、開口して上下の歯を表す。

桧縦一材製、薄肉彫。瞳孔（円形）と鼻孔、口孔（上下歯の間）を割りぬく。紐孔は左右の縁に各一をうがつ。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は緑系彩、眉毛と上瞼は黒描、眼球と上下歯は白彩、唇は赤彩である。面裏は拭漆、後縁面を平に彫り残して割りあげる。ノミ跡は全面にある。上部は横並びに、右側面は下方から目に向けて斜に、左側面はほぼ横に、下部は顎に沿って湾曲に、鼻下は垂直にそれぞれ変化に富んだ彫り方である。目の部分は円形、鼻の部分は洋梨形に彫りくぼめる。

保存状態は表面彩色と紐は後補、割損が右側面にある。

25 鬼神（阿形）一面 木造彩色／縦20.5 幅15.3 奥8.6／寛永13年（1636）

面裏墨書銘「二十二」

額広く、頬骨突き出て目を怒らせ、開口して上下の歯を表す。

縦一材製、薄肉彫。瞳孔（円形）と鼻孔、口孔（上下歯の間）を削りぬく。紐孔は左右の縁に各一をうがつ。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は茶彩、眼球は白彩、上瞼と目頭、目尻は黒描、上下唇は赤彩である。面裏は拭漆、後縁面を平に彫り残して削りあげる。ノミ跡は全面に浅くほぼ横並びにあり、目の部分は円形、鼻の部分は宝珠形に彫りくぼめる。

保存状態は表面彩色と紐は後補、墨書銘は後筆、割損が左口元から顎にある。補修のための布貼りが面裏の面頂から左側面にある。

26 鬼神（阿形）一面 木造彩色／縦20.5 幅17.7 奥12.0／寛永13年（1636）

額が瘤状に盛り上がり、剥きだした金色の目に鼻孔をひろげ、横長の口に金色の歯を見せる。耳の全形を表す。

縦一材製、厚肉彫。瞳孔（円形）と鼻孔、口孔（上下歯の間）を削りぬく。紐孔は左右の耳に各一をうがつ。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は黒彩、眼球と上下歯は弁柄漆に箔下漆を塗って箔を貼る。上下唇は赤彩である。面裏は黒彩、後縁面を厚く平に彫り残して削りあげ、目の部分は円形、鼻の部分は洋梨形に彫りくぼめる。瞳孔の内側に箔を貼り、鼻孔の内側は赤彩である。

保存状態は表面彩色と箔押し、紐、黒漆塗は後補、割損が左側面の面頂から顎にある。

27 鬼神（瘴見）一面 木造彩色／縦21.6 幅19.3 奥13.5／寛永13年（1636）

横幅の広い正方形に近い仮面である。眉間に鏝繋ぎ状の窘縮を表し、口を一文字に結んで鼻孔をひろげ、頬から口元に深くくぼみを表す瞋怒相。耳の全形を表す。

桐縦一材製、厚肉彫。瞳孔（楕円形）と鼻孔を削りぬく。紐孔は左右の縁に各一をうがつ。表面は錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は弁柄色彩、眼球は弁柄漆に箔下漆を塗って箔を貼る。眉毛と口髭、顎鬚は金泥描、上下唇は赤彩である。面裏は黒漆塗、後縁面を厚く平に彫り残して削りあげる。ノミ跡はほぼ全面にあり、目の部分は円形、鼻の部分は洋梨形に彫りくぼめる。

保存状態は表面彩色と箔押し、紐、黒漆塗は後補、その彩色も一部に剥落がある。

28 鬼神（瘴見）一面 木造彩色／縦21.5 幅19.3 奥12.8／寛永13年（1636）

額に二筋の深い皺を刻み、眉間に鏝繋ぎ状の窘縮を表す。鼻孔をひろげ口を一文字に結び、耳の全形を表す。

桧縦一材製、厚肉彫。瞳孔（円形）と鼻孔を削りぬく。紐孔は左右の耳に各一をうがつ。表面は錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は赤彩、眼球は弁柄漆に箔下漆を塗って箔を貼る。眉毛と顎鬚、頬髯は黒描である。面裏は黒漆塗、後縁面を厚く平に彫り残して削りあげる。細く浅いノミ目が全面にあり、目の部分は円形、鼻の部分は洋梨形に彫りくぼめる。

保存状態は表面彩色と箔押し、紐、面裏の黒漆塗は後補、その彩色も一部に剥落がある。割

損が面長から両瞳孔の内側にあり、補修のための布貼りが面裏の口元から顎にある。

29 鬼神（癡見）一面 木造彩色／縦20.5 幅17.4 奥11.0／寛永13年（1636）

額が瘤状に隆起し、眉間に鑢繋ぎ状の窘縮を表し、口をへしめ耳の全形を表す。

縦一材製、薄肉彫。瞳孔（楕円形）と鼻孔を削りぬく。紐孔は左右の耳に各一をうがつ。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は鉄納戸彩、眼球は弁柄漆に箔下漆を塗って箔を貼る。上下唇は赤彩である。面裏は拭漆、後縁面を厚く平に彫り残して平滑に削りあげる。目の部分は円形、鼻の部分は洋梨形に彫りくぼめる。

保存状態は表面彩色と箔押し、紐は後補、その彩色も一部に剥落がある。欠損が面裏の面頂にあり、補修のための布貼りが面裏の面頂から眉間にかけてと顎の二ヵ所にある。

30 鬼神（癡見）一面 木造彩色／縦20.5 幅17.4 奥11.0／寛永13年（1636）

面頂部や耳、表面彩色に若干の相違はあるが、29とほぼ同一である。

保存状態は表面彩色や紐は後補、割損が顎にある。補修のための布貼りが面裏の左側面と額に、和紙貼りが顎にある。他にも補修の跡が上部や右側面にある。

31 鬼神（癡見）一面 木造彩色／縦19.0 幅15.0 奥9.0／寛永13年（1636）

面裏陰刻銘「二十」

眉毛を隆起させ、眉間に窘縮を表す。鼻孔脇から口元に皺を刻み、耳の全形を表す。

桐縦一材製、薄肉彫。瞳孔（円形）と鼻孔を削りぬく。紐孔は左右の耳に各一をうがつ。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は苦色彩、眉毛と顎鬚は黒描、上唇は赤描、眼球は弁柄漆に箔下漆を塗って箔を貼る。面裏は拭漆、後縁面を薄く平に彫り残して平滑に削りあげる。目の部分は円形、鼻の部分は洋梨形に彫りくぼめる。

保存状態は表面彩色と箔押し、紐は後補、割損が右側面にあり、布貼りが面裏の顎にある。

32 鬼神（吽形）一面 木造彩色／縦20.1 幅16.6 奥12.0／寛永13年（1636）

面裏墨書銘「廿五」

太い眉毛に鼻梁太く、口をへしませ眉間に窘縮を表す。逆立つ眼球を金色に表し、そのまわりに朱を添え、怒りを強調する。

桐縦一材製、厚肉彫。瞳孔（円形）と鼻孔を削りぬく。紐孔は左右の縁に各一をうがつ。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は肌色彩、眼球は漆箔、そのまわりは赤描である。面裏は拭漆、後縁面を厚く平に彫り残して削りあげる。ノミ跡は全面に横並びにあり、目の部分は円形、鼻の部分は洋梨形に彫りくぼめる。

保存状態は表面彩色と漆箔、紐は後補、彩色の一部も剥落する。割損が面頂から顎にある。

33 鬼神（吽形）一面 木造彩色／縦20.3 幅16.7 奥10.4／寛永13年（1636）

面裏墨書銘「三五」

上目使いの金色の目に、庇状の眉が半ばおおいかわさる。鼻梁が短く鼻翼の張った小鼻や、口をへしめて口元に皺をつくる表情など激しい怒りの相である。

桧縦一材製、厚肉彫。瞳孔（円形）と鼻孔を削りぬく。紐孔は両耳の上縁に各一をうがつ。

表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は柿色彩、眼球は弁柄漆に箔下漆を塗って箔を貼る。面裏は拭漆、後縁面を厚く平に彫り残して割りあげる。ノミ跡は額と顎にある。目の部分は円形、鼻の部分は洋梨形に彫りくぼめる。

保存状態は表面彩色と箔押し、紐は後補、その彩色も一部に剥落がある。補修のための布貼りが面裏の面頂左右にある。

34 鬼神（吽形）一面 木造彩色／縦20.2 幅14.5 奥10.0／寛永13年（1636）

面裏墨書銘「二十」

額が瘤状に盛りあがり、眉を隆起させ眉間に窘縮を表す。驚鼻は鼻孔をひろげ、目を吊りあげ唇を強く結ぶ怒りの相である。

桐縦一材製、薄肉彫。瞳孔（円形）と鼻孔を割りぬく。紐孔は左右の縁に各一をうがつ。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は赤錆色彩、眼球は漆箔である。面裏は拭漆、後縁面を薄く平に彫り残して割りあげる。ノミ跡は額や右側面、口元にわずかに残る。目の部分は円形、鼻の部分は洋梨形に彫りくぼめる。

保存状態は表面彩色と漆箔、紐は後補、左右側面や顎に補修の跡がある。

35 鬼神（吽形）一面 木造彩色／縦19.5 幅16.2 奥12.2／寛永13年（1636）

面裏墨書銘「二八」

冠型を表す。眉毛を逆立て、眉間に窘縮を表し、太い驚鼻に口をへしめる臍怒相である。

縦一材製、薄肉彫。瞳孔（円形）と鼻孔を割りぬく。紐孔は左右の縁に各一をうがつ。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は駱駝色彩、冠型は黒彩、眉毛と口髭は黒描、眼球は弁柄漆に箔下漆を塗って箔を貼る。面裏は拭漆、後縁面を平に彫り残して割りあげる。ノミ跡は全面にほぼ横並びにある。

保存状態は表面彩色と箔押し、紐は後補、その彩色も一部に剥落がある。面裏の左側面に欠損があり、補修のための布貼りが左側面から顎にある。

36 鬼神（吽形）一面 木造彩色／縦20.7 幅15.5 奥9.2／寛永13年（1636）

面裏墨書銘「三十一」

面長、口を結んで眉と目を逆立てる壮年の男面である。

桐縦一材製、薄肉彫。瞳孔（円形）と鼻孔を割りぬく。紐孔は左右の縁に各一をうがつ。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は茶彩、眉毛と上瞼は黒描、眼球は白彩、唇は赤彩である。面裏は拭漆、後縁面を平に彫り残して割りあげる。ノミ跡は全面にあり、目の部分は円形、鼻の部分は洋梨形に彫りくぼめる。

保存状態は表面彩色と紐は後補、割損と補修のための布貼りが面裏の右側面にある。

37 鬼神（武悪）一面 木造彩色／縦20.4 幅15.6 奥10.8／寛永13年（1636）

面裏朱漆銘「三三」

額に複雑に乱れた皺を刻む。上瞼が深く両眼をおおい、鼻柱が太く鼻孔をひろげ、金色の上歯を見せて下唇をかむ老貌相。耳の全形を表す。

桐縦一材製、瞳孔（円形）と鼻孔を削りぬく。紐孔は左右の耳に各一をうがつ。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は黒彩、眼球と上歯は弁柄漆に箔下漆を塗って箔を貼る。面裏は拭漆、後縁面を平に彫り残して削りあげる。浅いノミ目がほぼ全面に横並びにあり、目の部分は円形、鼻の部分は洋梨形に彫りくぼめる。

保存状態は表面彩色と箔押し、紐は後補、その彩色も一部に剥落がある。欠損が面頂と右顎にあり、補修のための布貼りが面裏の額と顎、左側面にある。

38 鬼神（武悪）一面 木造彩色／縦21.5 幅18.9 奥14.8／寛永13年（1636）

顔の中央に大きな鷲鼻を表す。眉間にX形の窘縮を表し、眉毛と顎鬚、頬髯を生やし、金色の上歯で下唇をかむ。耳の全形を表す。

桧縦一材製、厚肉彫。瞳孔（楕円形）と鼻孔、口孔の左右を削りぬく。紐孔は左右の耳に各一をうがつ。表面は錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は駱駝色彩、眼球と上歯は弁柄漆に箔下漆を塗って箔を貼る。眼球の輪郭と上唇は赤彩、眉毛と顎鬚、頬髯は黒描である。面裏は黒漆塗、後縁面を厚く平に彫り残して削りあげる。ノミ跡は全面に横並びにある。目の部分は円形、鼻の部分は洋梨形に彫りくぼめる。

保存状態は表面彩色と箔押し、紐、面裏の黒漆塗は後補、その彩色も一部に剥落がある。顎鬚の一部に汚れがあり、補修のための布貼りが面裏の面頂中央から顎にある。

39 鬼神（武悪）一面 木造彩色／縦20.8 幅15.7 奥10.8／寛永13年（1636）

小鼻のふくらんだ大きな鼻、太い眉に頬の筋肉が隆起し、上歯で下唇を噛む下顎の張った怪貌相。耳の全形を表す。

縦一材製、厚肉彫。瞳孔（半月形）と鼻孔を削りぬく。紐孔は左右の耳の上縁に各一をうがつ。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は肌色彩、眼球と上歯は弁柄漆に箔下漆を塗って箔を貼る。歯茎は赤描である。面裏は拭漆、後縁面を厚く平に彫り残して削りあげる。ノミ跡はほぼ全面にある。

保存状態は表面彩色と箔押し、紐は後補、割損が面頂左右と顎にある。

40 鬼神 一面 木造彩色／縦20.3 幅15.6 奥10.2／寛永13年（1636）

面裏墨書銘「三七」

金色の両目を見開き、眉間に窘縮を表す。三山形に意匠化された眉や、V字形に切り裂けた口から金色の前歯と牙を表す怪貌相である。

桧縦一材製、薄肉彫。瞳孔（円形）と鼻孔を削りぬく。紐孔は左右の縁に各一をうがつ。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は葡萄茶彩、眼球と前歯、牙は弁柄漆に箔下漆を塗って箔を貼る。面裏は拭漆、後縁面を彫り残して削りあげる。ノミ跡はほぼ全面に横並びにあり、目の部分は円形、鼻の部分は洋梨形に彫りくぼめる。

保存状態は表面彩色と箔押し、紐は後補、その彩色も一部に剥落がある。補修のための布貼りが面裏の顎に二ヵ所ある。

41 鬼神 一面 木造彩色／縦22.4 幅17.9 奥12.8／寛永13年（1636）

面裏陰刻銘「卅四」

額広く、鼻孔を一杯に広げ、上歯で下唇をかみ牙を表す瞋怒相。耳の全形を表す。

桧縦一材製、厚肉彫。瞳孔（円形）と鼻孔を削りぬく。紐孔は左右の耳に各一をうがつ。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は肉桂色彩、眉毛と顎鬚は黒描、眼球と上牙は弁柄漆に箔下漆を塗って箔を貼る。額のV字や眼球のまわり、鼻翼から鼻下、頬、顎のまわりは赤描である。面裏は黒漆塗、後縁面を厚く彫り残して削りあげる。目の部分は円形、鼻の部分は洋梨形に彫りくぼめる。瞳孔と鼻孔の内側は肉桂色彩である。

保存状態は表面彩色と箔押し、紐、面裏の黒漆塗は後補である。補修のための布貼りが面裏の右面頂にあり、顎の周辺にも補修の跡がある。

42 鬼神 一面 木造彩色／縦20.3 幅16.0 奥8.3／寛永13年（1636）

面裏墨書銘「廿九」

鼻柱太く瞋目して眉と目を吊りあげ、口髭と顎鬚を生やし、開口して上歯を表す下膨れのした風貌である。

桧縦一材製、厚肉彫。瞳孔（円形）と鼻孔を削りぬく。紐孔は左右の縁に各一をうがつ。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は肌色彩、眼球と上歯は白彩、眉毛と上脛、口髭、顎鬚は黒描である。上下唇は朱彩である。面裏は拭漆、後縁面を平に彫り残して削りあげる。ノミ跡は全面にあり、目の部分は円形、鼻の部分は洋梨形に彫りくぼめる。

保存状態は表面彩色と紐は後補、補修のための布貼りが面裏の左鼻孔から顎にあり、面頂にも補修の跡がある。

43 鬼神（生成） 一面 木造彩色／縦20.2 幅14.8 奥8.7／寛永13年（1636）

面裏墨書銘「四九」

面頂の左右に小さな角を表し、金色の目を逆立て、真赤な舌と黒歯を表す怪貌相である。

桧縦一材製、薄肉彫。瞳孔（楕円形）と鼻孔、口孔（上下歯の間）を削りぬく。紐孔は左右の縁に各一をうがつ。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は薄青色彩、眼球は弁柄漆に箔下漆を塗って箔を貼る。頭髮は黒彩と黒描、眉毛と目のまわり、鼻翼から口元、頬から顎にかけて輪郭は水色描と藍描を重ねる。面裏は拭漆、後縁面を薄く平に彫り残して削りあげる。ノミ跡はほぼ全面にあり、目の部分は円形、鼻の部分は洋梨形に彫りくぼめる。

保存状態は表面彩色と箔押し、紐は後補、その彩色も一部に剥落がある。欠損が面裏の面頂に二ヵ所あり、補修のための布貼りが両頬から顎にある。

44 禽獣 一面 木造彩色／縦20.8 幅18.1 奥12.0／寛永13年（1636）

面裏墨書銘「四三」

額の中央が瘤状に盛りあがり、両目を剥き出し、口元裂けて歯と牙を表す不気味な禽獣面である。耳の全形を表す。

桧縦一材製、頭頂に少材を矧ぐ、厚肉彫。瞳孔（円形）と鼻孔、口孔（上下歯の間）を割りぬく。紐孔は両耳の中央に各一をうがつ。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は黒紫色彩、眼球は弁柄漆に箔下漆を塗って箔を貼る。上下唇は赤彩、上下歯と牙は白彩である。面裏は拭漆、後縁面を厚く平に彫り残して平滑に割りあげる。目の部分は円形、鼻の部分は宝珠形に彫りくぼめる。

保存状態は表面彩色と箔押し、紐は後補、その彩色の一部も剥落する。割損が面頂中央から顎にある。補修のための布貼りが面裏の両瞳孔の下方にあり、和紙貼りが左面頂から頬にある。

45 禽獣（烏天狗）一面 木造彩色／縦20.0 幅15.9 奥18.0／寛永13年（1636）

面裏陰刻銘「四五」

額が盛りあがり、目を怒らせ、嘴を突き出し口を強く結ぶ。

縦一材製、嘴は別材、厚肉彫。瞳孔（円形）と左右の口孔（上下歯の間）を割りぬく。紐孔は左右の縁に各一をうがつ。鼻孔は少し窪めるが面裏には貫通しない。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は石板色彩、眉毛は金泥描と白描、眼球は弁柄漆に箔下漆を塗って箔を貼る。鼻孔と上下唇は赤彩である。面裏は拭漆、後縁面を平に彫り残して割りあげる。ノミ跡は半円形を描くように全面にある。目の部分は円形、鼻の部分は三角形に彫りくぼめる。

保存状態は表面彩色と箔押し、紐は後補、その彩色も一部に剥落がある。補修のための布貼りが面裏の面頂から左瞳孔までと下唇から頬にある。

46 禽獣（河童）一面 木造彩色／縦20.1 幅18.6 奥10.3／寛永13年（1636）

三角状の大きな嘴に金色の牙を表し、ギョロリと剥いた金色の目玉に上瞼が覆う不気味な禽獣面である。耳の一部を表す。

桧縦一材製、厚肉彫。瞳孔（楕円形）と左右の鼻孔を割りぬく。紐孔は左右の耳に各一をうがつ。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は深緑彩、眉毛と口髭、顎鬚は黒描、眼球と牙は弁柄漆に箔下漆を塗って箔を貼る。面裏は拭漆、後縁面を薄く彫り残して平滑に割りあげる。

保存状態は表面彩色と箔押し、紐は後補、補修のための布貼りが面裏の面頂と両側面にある。

47 禽獣 一面 木造彩色／縦19.2 幅14.3 奥15.5／寛永13年（1636）

面裏陰刻銘「八」

額と嘴が盛りあがって眼窩が窪み、口を結んで嘴を突き出す。眉毛と顎鬚、頬髯を薄く表す。

桧縦一材製、薄肉彫。瞳孔（円形）と左右の口孔（上下唇の間）を割りぬく。紐孔は左右の縁に各一をうがつ。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は枯竹色彩、顎鬚と頬髯は黒描、眼球は弁柄漆に箔下漆を塗って箔を貼る。上下唇は赤彩である。面裏は拭漆、後縁面を薄く平に彫り残して割りあげる。ノミ跡は額と鼻、顎に少し残すが他は平滑に割りあげる。

保存状態は表面彩色と箔押し、紐は後補、その彩色も一部に剥落がある。補修のための布貼

りが面裏の面頂と左右側面にある。

48 禽獣 一面 木造彩色／縦19.6 幅14.6 奥16.5／寛永13年（1636）

面裏白書銘「三」

面長、眉と目を逆立て、嘴をとがらせ怒りの相を表す。

縦一材製、薄肉彫。瞳孔（円形）と左右の口孔（上下唇の間）を削りぬく。紐孔は左右の縁に各一をうがつ。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は白彩、眉毛は黒描、眼球は弁柄漆に箔下漆を塗って箔を貼る。上下唇と鼻孔は赤描である。面裏は拭漆、後縁面を平に彫り残して削りあげる。ノミ跡は全面に不規則にある。

保存状態は表面彩色と箔押し、紐は後補、その彩色の一部も剥落する。欠損が顎にあり、補修のための布貼りが面裏の左右側面と顎にある。「三」の白書も後筆である。

49 禽獣（狼）一面 木造彩色／縦17.8 幅14.8 奥14.0／寛永13年（1636）

面裏陰刻銘「四七」

顎が隆起し、眉と目を逆立て、開口して上下の歯と牙を見せる禽獣面である。

縦一材製、薄肉彫。瞳孔（楕円形）と口孔（上下歯の間）を削りぬく。紐孔は左右の縁に各一をうがつ。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は石板色彩、眼球は弁柄漆に箔下漆を塗って箔を貼る。眉毛と鼻孔は白描、上下唇は赤彩、上下歯と牙は白彩である。面裏は拭漆、後縁面を薄く平に彫り残して削りあげる。ノミ跡はほぼ全面に残す。

保存状態は表面彩色と箔押し、紐は後補。欠損は面頂左側面にあり、割損が両側面にある。補修のための布貼りが面裏の面長中央と右瞳孔、口元にある。「四七」の陰刻銘も後補である。

50 禽獣（狐）一面 木造彩色／縦18.5 幅14.5 奥10.0／寛永13年（1636）

顎が瘤状に盛りあがり、目尻を逆立て、嘴を突きだす顎の細い狐面である。

縦一材製、薄肉彫。瞳孔（円形）と左右の口孔（上下唇の間）を削りぬく。紐孔は左右の縁に各一をうがつ。表面は平滑に仕上げ、錆下地に胡粉下地彩色（後縁面にまわる）を施す。面部は枯竹色彩、眼球は白彩、目頭と目尻は赤描、口髭は黒描、上下唇は赤描である。面裏は黒漆塗、後縁面を薄く平に彫り残して平滑に削りあげる。

保存状態は表面彩色と紐、面裏の黒漆塗は後補である。補修のための布貼りが面裏の面頂から顎にかけて三ヵ所にある。

【猿面】

1 猿 三十面 木造彩色／縦17.2 幅11.5 奥7.5／江戸時代初期

面頂、顎が広く、目の下や鼻梁の上部、口元に皺を刻む。耳の一部を表す。

縦一材製、薄肉彫。瞳孔（円形）と鼻孔を削りぬく。紐孔は左右の縁に各一をうがつ。表面は平滑に仕上げ、錆下地に弁柄漆を塗る。面部は弁柄漆塗、頭髮は緑彩と緑描、眼球は弁柄漆に箔下漆を塗って箔を貼る。面裏は黒漆塗、後縁面を薄く平に彫り残して削りあげる。

保存状態は表面の弁柄漆塗や面裏の黒漆塗、紐は後補である。面裏の数字も後筆である。

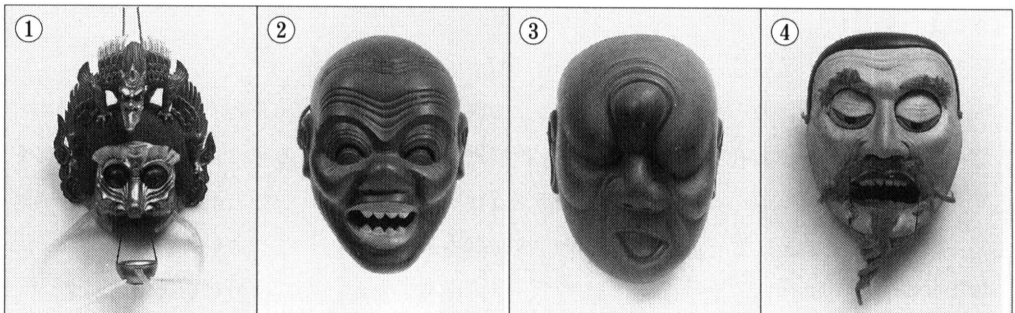
※三十面はほぼ同形だが、頭部が大きく顎の細い面や骨太の面、瞳孔が眼球の中央や上下にあるものなどの相違がある。頭髪も緑系と黒系（煙煙）の二種類である。

結び

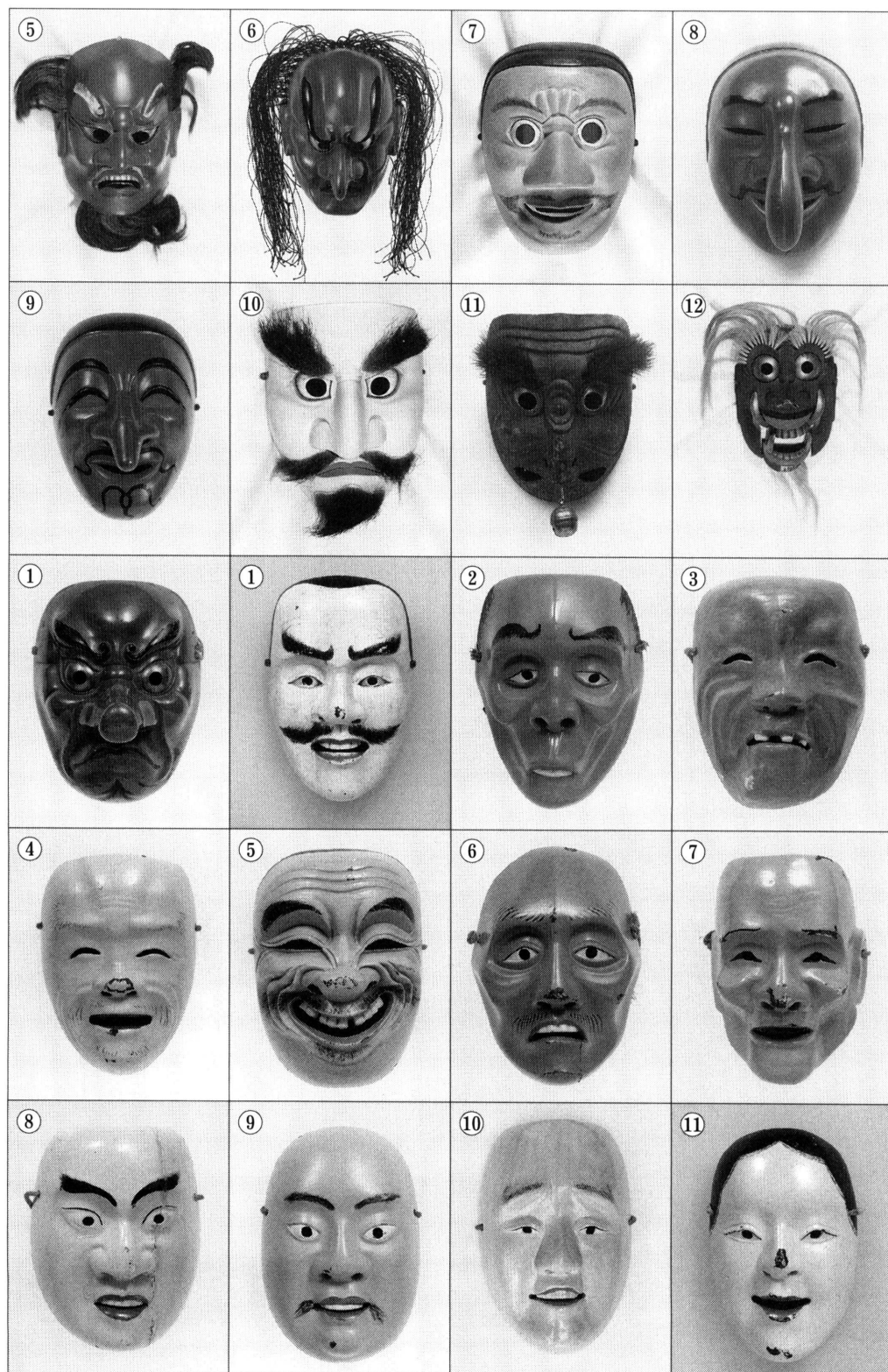
永正6年（1509）に連歌師宗長が日光に来山した時、猿楽師の宮増源三が同席して謡や舞に興じた。また宇都宮二荒山神社の「造宮日記」に、社殿の造替の際に猿楽や田楽が演じられたが、日光在の芸能集団の者と思われる猿楽師の実教坊と宝蔵坊の2名が参加している。輪王寺の常行堂では、修正会や大念仏会など重要な法会が堂内の東北隅に祀られた摩多羅神の御前で行なわれたが、その際に堂衆や芸能者たちによって猿楽や田楽、大衆舞が奉納された。「常行堂供養之次第」によると、享禄2年（1529）3月に行なわれた常行堂供養の2日目に延年と称して能八番と式三番、狂言が奉納された。演能に関わった人々は「総数五十余人」とある。越前より下向した大夫祖分も参加しての、かなり大がかりな設営である。

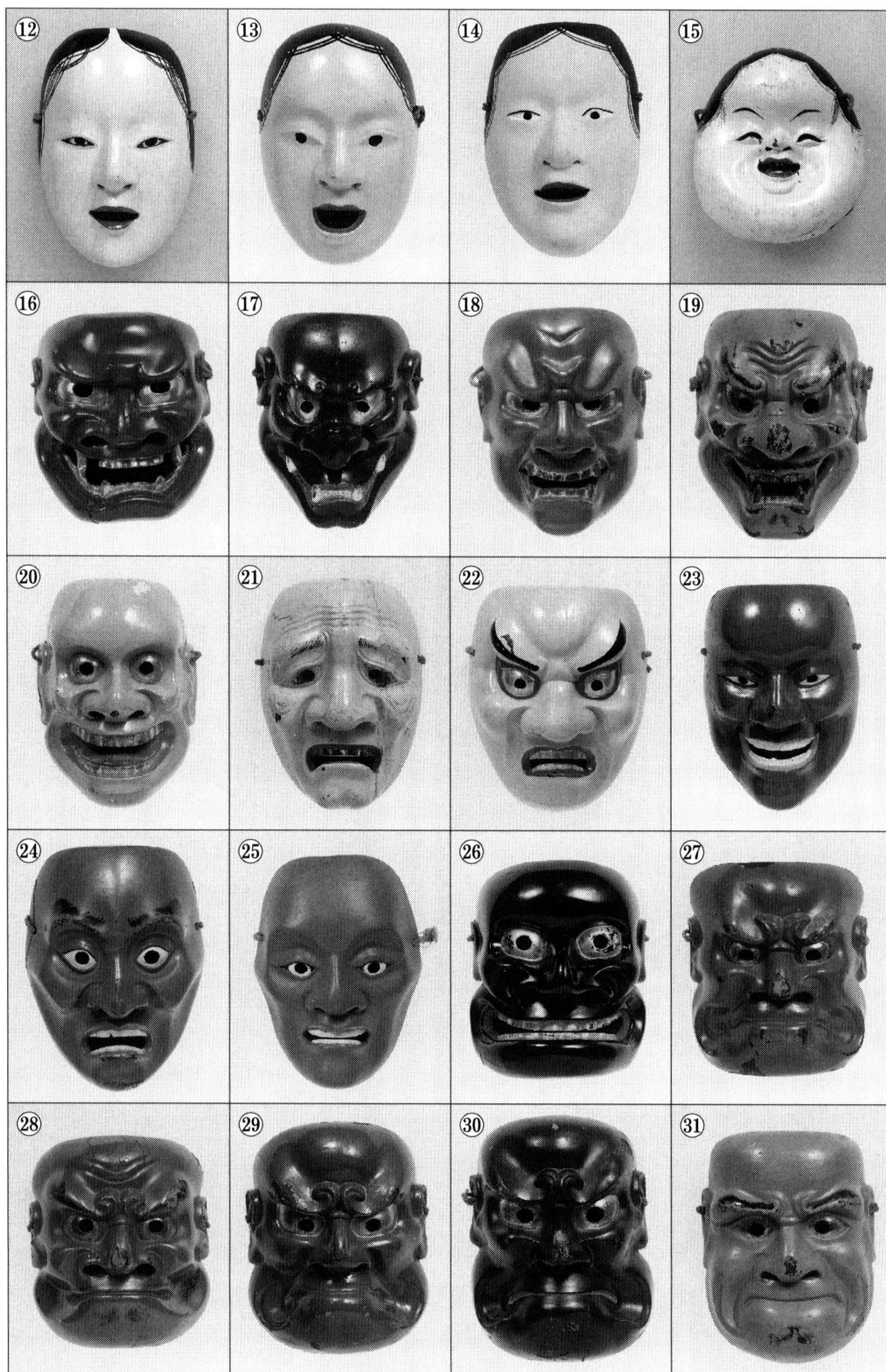
古代・中世の日光山は、観音や阿弥陀を中心とする日光三所権現信仰であったが、元和3年の東照社の鎮座によって東照大権現を中心とする東照三所権現信仰に変わった。「日光山条目」に「諸事東照宮をもって本と為すべし」とあるように、それまでの伝統的な宗教行事や法会が廃止されてしまったのである。そのため、残された道具類も用途の分からなくなったものが多い。仮面類もその一つである。しかし能面の型が完成するのは桃山時代から江戸時代初期にかけてだが、輪王寺や二荒山神社の仮面はいまだ定型化する以前の野趣に富んだ古様な仮面群である。墨書銘のあるもの81面、箱書や文献によって制作年代の分かるものが51面、合計277面である。質量ともに全国的にもレベルの高い貴重な仮面である。

最後に、調査にあたり東照宮、輪王寺、二荒山神社の関係者の方々に大変お世話になった。心よりお礼を申し上げたい。写真は輪王寺と二荒山神社のものは、輪王寺と栃木県立博物館から拝借した。東照宮と輪王寺の一部は和泉光登氏の撮影されたものを使用した。北口の撮影したものも一部ある。二社一寺の仮面の調査をした結果、予想以上に多くの仮面が確認されたため、原稿制限もあり表裏すべての写真を掲載できなかったのが残念である。拙論を書くにあたり本文中に記載したもの以外に、下記のを参考にした。大河内直躬『東照宮』鹿島出版社 1970年。『日光市史 中巻』日光市 1979年。『日光山輪王寺舞樂装束』サントリー美術館 1981年。『日光市史 史料編上・中巻』日光市 1986年。『日光山輪王寺の仮面』町田市立博物館 1992年。『関東の仮面Ⅲ』町田市立博物館 1998年。菅原信海『日本人の神と仏—日光山の信仰と歴史』法蔵館 2001年。



日光の仮面Ⅳ





日光の仮面Ⅳ

